



TITLE:

フランス語人称代名詞の転用

AUTHOR(S):

田口, 紀子

CITATION:

田口, 紀子. フランス語人称代名詞の転用. 仏文研究 1992, 23: 1-10

ISSUE DATE:

1992-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137794>

RIGHT:

フランス語人称代名詞の転用¹⁾

田 口 紀 子

0. はじめに

フランス語では、本来用いられるべき人称代名詞の代わりに、別の人称代名詞が用いられることがあり、この事象は一般に「人称代名詞の転用」(la transposition de personne) と呼ばれている。例えば母親が子供に向かって話しかける場合、tu を用いる代わりに、

- (1) J' ai été bien sage?
- (2) Nous avons été bien sage?
- (3) On a été bien sage?
- (4) Il a été bien sage?

というふうに、様々な人称代名詞を使うことができる。tu の代わりに用いられるこれらの代名詞は、しばしば「親愛語」(hypocoristique) であると説明される。しかし説明されるべきなのは、なぜこれらの代名詞が用いられるときに hypocoristique な効果が現われるのか、言いかえれば、そのような効果をあげるためになぜこれらの代名詞が用いられるのか、という転用のメカニズムであるだろう。はたして(1)-(4)の間にニュアンスの違いがあるのか、それとも全く等価であるのかといった問題も、そのメカニズムが解って初めて議論されることができるようになる。

他方、je の代わりに用いられる全く逆の効果を持つ nous がある。一つは一人称単数の je が持つ遠慮の無さを隠すための、いわゆる “*nous d'auteur*”, もう一つは、公式の文書や、政治的演説に現われる, “*nous autoritaire*” あるいは “*nous de majesté*” である。同じ nous という代名詞が、このように正反対の価値を持つことは、どのように説明したら良いのだろうか？

我々は、二つの異なった現象が、これらの人称代名詞の転用の裏に存在すると考える。一つは、人称間の対立を解消するための発話の人称構造の変換、もう一つは、指示対象に不定性を付与するための複数化である。そして on による転用も、on を汎・人称性を持った実詞であると考えることによって、他の人称代名詞の転用と同様、この二つの現象による枠組みで扱えることを示した

いと思う。

1. フランス語人称代名詞の特徴

フランス語の人称代名詞のシステムは、何よりもその発話行為に対する依存性によって特徴づけられる。je と tu が誰をさすのかは、具体的な発話行為の中でしか決定され得ない。je とは自らを指して“je”という者であり、tu とは発話者がその人に向かって“tu”と呼びかける人物である。つまり、ある具体的な発話行為があれば、この二つの人称代名詞は自動的に、特定 (défini) の指示対象を獲得するのである。

これに対して il は、je と tu による発話行為から排除された者である。このことはしかし、必ずしも il が発話の場に不在であることを意味しない。一見会話に参加している人物を指すのに il を用いることもある。

(5) Je vous présente Monsieur X, il est le nouveau directeur de...

要点は、il がその発話行為の当事者ではないということである。実際、代名詞 il の指示対象は、談話において様々な位置をしめ得る。il は発話の場にいるかもしれないし、それまでの談話で導入されたものかもしれないし、そうでなければ発話者と共発話者の記憶の中で初めて見つけれられるものかもしれないのである。「彼」がどこにしようと確実なのは、「彼」は発話行為の参加者であるとは考えられていない者だということである。発話行為というのは、厳格に je-tu による二項的性格を持つものだからである。ある発話行為が与えられると、je と tu の指示対象は自動的に決定され、je でも tu でもないものは、il で表さなければならない。これが、我々が先ほど「発話行為に対する依存的性格」と呼んだ、フランス語人称代名詞の特徴である。

この結果として現われる、フランス語人称代名詞のもう一つの特徴は、その特定の (défini) な性質である。je と tu が発話状況の中で特定な指示対象を指すとすれば、il は発話者、共発話者以外の第三者で、その発話状況において間違いなく特定できるものでなければならない。

ただし、nous, vous, ils という複数の人称代名詞は、定・不定どちらの指示対象を持つこともできる。これらの代名詞は、<定である単数代名詞+α>という構造を持っているが、この α は定・不定どちらの場合もあり得るからである。(nous は je と tu を指す場合は全体として定になるが、je と不特定の他者を指す場合にはその指示対象全体は不定となる。)この点は、また後で問題となる。

この発話状況に対する依存性と、指示対象の定的性格は、フランス語人称代名詞の体系を、い

いわゆる「遊び」のないものになっている。je, tu, または il と言ったとたんに、我々は一つの限定された発話状況の中に絡み取られることになる。そこでは「誰が誰に対して誰について話しているか」という点に関していかなる誤認の可能性もないように、決定的に指示対象が付与されており、この三つの人称によって指示された対象の間には、発話行為をめぐって越えがたい溝ができるのである。

ところで我々はしばしばこの人称間の対立を解消したり、あるいは代名詞の指示対象のアイデンティティーをばかす必要を感じることがある。そのような場合に用いられるのが、「人称代名詞の転用」という手段なのである。以下の議論において、我々はこの「人称代名詞の転用」が二つの機能を持っていることを示そうと思う。一つは複数化による指示対象の不定化であり、もう一つは発話構造の変換による人称間の対立の回避である。

2. 複数化

まず複数形人称代名詞による転用の例を見てみよう。単数形人称代名詞によって、その指示対象が決定的に明白になることが好ましくない場合、複数形をその代わりに用いることによって、そのアイデンティティーをばかす事ができる。先ほどあげた “*nous d'auteur*” と、いわゆる “*nous de majesté*” がこれにあたる。単数であり、特定の発話者を指すために用いられる、この二つの *nous* の用法は、「謙遜」と「尊大」という正反対の効果を持つと言われている。しかしその構造はどちらも、〈真の発話者である単数の *je* + 不定の α 〉というものである。この不定の α が発話者の権威を支持するように働けば、それは “*nous de majesté*” となる。

- (6) Au nom du Peuple et de l'Empire français, Nous, Général De Gaulle, Chef des Français Libres, ... (Trésor)

この α が、発話者の他の人たちとの協力を意味する場合は、*nous* は *atténuation* として機能する。“*nous d'auteur*” がこの場合である。

- (7) Nous traiterons cette question dans la deuxième partie de l'ouvrage.

(Grand Larousse)

どちらの場合もその構造は、不定の α が特定の発話者にある不定量の外延を付加しているだけであるが、その外延が文脈によって異なった解釈をうけるのである。

ここでは詳しい議論はできないが、“vous de politesse”も同様に、〈tu défini〉に不定の α が付加されたものと分析することができると思われる。

3. 人称構造の変換

次に人称構造の変換の例をいくつか見てみよう。まず tu が、それ以外の人称の代名詞によって転換される場合がある。

- (1) Est-ce que j'ai été bien sage?
- (4) Est-ce qu'il a été bien sage?
- (2) Est-ce que nous avons été bien sage?

ここでは、子供に対して普通用いられる tu に代わって、他の三つの人称代名詞が観察されるが、転換の仕組みは、(1)、(4)と(2)で異なっている。

(1)、(4)では、発話者は自らの一人称を放棄し、その結果として相手の子供を二人称として把握することをやめ、自らが子供の立場に移行して発話していると考えられる。(1)ではその自然な結果として je が用いられている。(4)についても同様である。子供は自分の事を話すときには、je を用いる他に、大人たちが自分のことを話題にするときに用いる il をそのまま使うことがあるが、(4)の il はその「子供言葉」を発話者が使っているのである。このように、発話者は相手の子供に成り代わって発話し、それによって tu を使えばあらわになってしまう、je と tu の間にある避け難い対立、疑問文ではさらに強調されるこの対立を、回避しようとしているのである。この対立の回避が、結果として「親愛」の効果をあげるのである。

他方(2)のような、二人称単数の相手に対して nous を用いるケースは、大人同士の会話でも観察される。医者が患者に対して次のように言うことがある。

- (8) Eh bien, Madame, comment allons-nous?

ここでは相手に対する特別の気遣いが現われているが、同じ用法も場合によってはイロニックな効果をあげる。

- (9) Que de fois [...] étions nous arrêtés par quelque ami, qui, tapotant ma joue, me disait : <Hé bien, nous deviendrons un grand savant, comme le père?> (*Grand Robert*)

これらの一連の、二人称単数に代わる nous の用法では、(1), (4)で見たような、発話者の共発話者に対する同化は行われない。発話者は自分の一人称を放棄するのではなく、自分の利益を相手の利益と同一視することによって、相手の行為に一人称として参加するのである。このようにして行為主体としての nous が生まれることになる。この nous は、発話者が共発話者の行為に実際に好意的な場合には、親愛の情や、気遣いを表すが、共発話者に対して中立的、あるいは明らかに敵対する人物によって用いられるときには、イロニックな効果をあげるのである。

またここでは十分に論じることができないが、三人称に代わって用いられる nous も、同じ人称変換の構造を持っていると考えられる。例を一つだけ挙げておこう。弁護士は自分が弁護する人物を、次のように nous で指し示すことができる。

(10) Nous prétendons n'avoir commis aucun acte réprimé par la loi. (*Grand Larousse*)

複数人称代名詞と、定・不定の関係から指摘しておけば、複数化の例として検討した(6), (7)の nous は、不定の人称代名詞であるのに対して、人称の転換として取り上げた(2), (8), (9), (10) の nous は、発話者と共発話者、または発話者と特定の第三者を指示対象とする、定代名詞である。これらの nous は、発話者の他者の行為への連帯を表し、発話者と行為の実際の主体の間にある人称の対立は、こうして乗り越えられるのである。

4. on による人称代名詞の転用

我々の on の分析は、次の二つの前提に基づいている。その実詞性と、その汎・人称的性質である²⁾。on は一般に不定代名詞と考えられているが、我々は on はそのラテン語源である homo から、実詞としての性格と、「人一般」を示す意味とを受け継いでいると考える。

on の実詞としての性格は、他の代名詞と比べた場合明らかである。まず、他の人称代名詞は続いて現われる動詞の前でいちいち繰り返される必要はないが、on の場合は動詞ごとに繰り返されなければならない。

(11) Il frappe, entre, s'assied et se met au travail. (Muller)

(12) On frappe, on entre, on s'assied et on se met au travail. (Muller)

次に、on は主格しかなく、他の人称代名詞のような独自の斜格形を持たない。さらに、on には定

冠詞を付加できることも、その実詞性をうかがわせる特徴の一つである。

on が汎・人称的性格を持つこと、すなわち「私も、あなたも、人は誰でも」という、人称間の対立を中和するような意味内容を持つことは、on が不定かつ複数という価値を持つことを意味する。on の不定性ということは、我々の議論にとって重要な帰結をもたらす。すなわち定である他の人称代名詞の代わりに on が用いられる場合は、「等価」ではなく「競合」の関係にあるということの意味からである。もし on の使用が他の人称代名詞の等価の代用であるとしたら、これまで頻繁に指摘されてきた on の様々な文体的効果は生じ得ないはずである。

ここまでの考察で、on の使用自体が、先にみた人称代名詞による人称の転換と同じ構造を持っていることが明らかになったと思う。第一に、一／二／三人称という人称間の対立を持たない on は、他の人称代名詞を用いた場合には必然的に生じる人称間の対立を解消することができる。次に、on はその不定性と複数性のために、指示対象の定的性格をばかす効果をあげる。しかしこれまで見てきた人称代名詞による転換と異なるのは、on の場合には、この二つの操作が一つの使用例において、同時に行われるという点である。

- (13) Le travail dont on expose les résultats dans cet ouvrage a été compris par nous comme l'expérience d'une méthode grammaticale. (*Robert/Trésor*)

- (14) Ma belle mine fit le reste, car il faut bien dire qu'on sait se présenter. (*Trésor*)

この二つの on の用例は、je の代わりに用いられているが、nous による転用のケースがそうであったように、正反対の効果をあげている。(13) の on は、*Trésor* の説明によれば、「慎み深さと遠慮」を表している。他方 (14) では、on の持つ傲慢な効果は明らかである。どちらの場合も、nous と同じように、je 固有の支持対象への不定量の外延 α の付加が行われており、この α が発話者のアイデンティティー、礼を失わないためには、あるいは逆に尊大になるためには明白すぎるアイデンティティーをカモフラージュしているのである。しかしそれに加えて、on がその汎・人称的性格のために、不定量 α だけでなく、共発話者とそれ以外の人間をも、潜在的に含んでいるところから、それぞれの文体的効果がさらに強調されているのである。(6)、(7) の nous は、je と不特定多数の第三者を含むものだったが、on は je と不定・複数の第三者に加えて tu をもまきこんでいるのである。

on による転用を網羅的に見て行く余裕はないが、もう一つの具体例として、tu の転用としての on を、nous による転用と比べて検討してみよう。

- (2) Est-ce que nous avons été bien sage?

- (3) Est-ce qu'on a été bien sage?

このような状況では、on による tu の転用は常に可能であるが、nous による転用は発話者と子供の間に前もって親密な関係が成立している場合にしか行われなことが、青木 (89) によって指摘されている。その理由はおそらく、nous が発話者である je を、子供である tu と結びつけることによって、親愛の情を表現するという構造を持つ点にあると思われる。つまりこの結びつきによって、彼ら二人は、彼らの緊密な関係から排除された第三者達と対立し、この対立がさらにディスクールの親密さを増しているのである。それに対して、on は子供に最大限の外延を与える。子供は「私」と「あなた」が結びついたものだけではなく、「すべての人間」になるのである。このようにして on による転用は nous と同じような拡大効果をあげるが、nousの方が他者を排除する分だけ親密さが強く、指摘された使用の制限は、ここに起因するものだと考えられる。

5. 不定の ils と on

最後に不定の ils と on の違いについて簡単にふれておきたい。on は、文脈による制限を受けないとき、すなわち他の人称代名詞の転用として用いられないときは、“moi, toi et tout le monde” という本来の価値を保持し、人称代名詞で言えば「不定の nous」とほぼ等価となる。文脈に左右されない格言の on がこのケースである：

- (15) Quand on veut quelque chose dans l'existence on y arrive. (Boutet)

もしも文脈から、発話者と共発話者がその行為から排除されていることが明白な場合は、結果として on は転用となり、不定の ils と同じように解釈される。

- (16) Mariette, l'ombrelle et l'écharpe; on s'impatiente peut-être à la maison. (Trésor)

- (17) Bon je vois sur le journal qu'à la SKF on embauchait. (Boutet)

このような文脈では、on と ils はどちらも「人は」という意味になり、on は不定の ils と等価であるように見える。

しかし、je/tu 以外の人間が問題になっていることが解っている場合でも、ils の使用は on の使用よりも条件がきついのである。不定の ils を用いるためには、まず個々の指示対象ではなく、指示対象が属している集団のアイデンティティーがはっきりしていなければならない。どの集団が問題になっているのかがはっきりしていない場合には、いくら je/tu 以外の人間を指すことが

明白なコンテキストでも、ils は用いられない。例えば、

(18) On frappe à la porte.

とはいつでも言えるけれども、どのグループの人間かが解っていなければ

(19) Ils frappent à la porte.

は難しい。

不定の ils のもう一つの使用条件は、発話者と共発話者がその集団に属していないことが確実でなければならないということである。ここから ils の持つ「軽蔑」「さげすみ」というニュアンスが生じるのであり、このニュアンスは on は本来持っていないものである。もし Moignet が言うように、「ils が on よりも少ない度合の不定性を示す³⁾」としたら、それは ils が特定のクラス、そこから「我々」が決定的に排除されているような、なんらかの意味的特徴を持っているあるクラスを構成するからなのである。フランス人にとってそのクラスとは、*Le Bon Usage* のあげている例文によれば、「国家」「税務署」そして「外国人」であるらしい。

(20) Ils, c'est tout le monde : les patrons pour les employés, les employés pour les patrons, les domestiques pour les maîtres de maison, les maîtres de maison pour les domestiques, les automobilistes pour les piétons, les piétons pour les automobilistes et, pour les uns comme pour les autres, les grands ennemis communs : l'Etat, le fisc, l'étranger.
(P. Daninos cité dans *Le Bon Usage*)

そしてこの nous と ils の間の対立を緩和するのが、on による転用なのである。

(21) Vous avez écrit au ministère. Qu'est-ce qu'ils vous ont répondu?

(22) Vous avez écrit au ministère. Qu'est-ce qu'on vous a répondu?

(21)の ils が持っている「奴ら」というニュアンスは、(22)の on にはない。両者とも不定ではあるが、ils は nous を排除した「不定」であるのに対して、on は本来 nous をも含み得る「不定」である。

(23) On se couchait dix mille, on se réveillait cent. (V. Hugo cité dans Cressot)

について Cressot は、「レシにおいて、ils の代わりに on を用いることによって、作者はその行為に自ら参加し、また読者をも参加させることができるのである」と指摘するが、この文体的効果の背後には、このような転用のメカニズムが存在するのである。

6. 結 語

我々がこの論文で明らかにしようとしたのは、フランス語の人称代名詞の転用は、どんな転用もが許容されるわけではなく、ある決まったメカニズム、つまり複数化による指示対象の不定化と、発話構造の変換による人称間の対立の回避という、二つの論理を持っているということである。そしてこの転用という事象は、フランス語の人称代名詞の持つ定的、相互排他的性格と、談話レベルでの発話者の必要との間の葛藤を反映しているのである。

NOTES

- 1) この論文は、1992年4月 Zurich で開催された、20° Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes での口頭発表を、若干の変更を加えて訳出したものである。フランス語の version は、*Les Actes du 20° Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes*, Maison K. G. Saur, Munich に掲載される予定である。
- 2) 詳しくは田口 (90) を参照されたい。
- 3) Moignet (1965), pp. 157-158.

REFERENCE

- Atlani, (F.) "On L'illusioniste" in *La langue au ras du texte*, PUL, 1984, Lille, pp. 13-29.
- Boutet, (J.) "La concurrence de "on" et "i" en français parlé" in *Linx*, n° 18, 1988, Nanterre, pp. 47-66.
- Cressot, (M.) "Transposition de personne et impersonnalisation", in *Français Moderne*, n° 11, 1943, pp. 255-262.
- Dauzat, (A.) "Les interversions de genre à valeur affective", in *Français Moderne*, n° 9, 1941, pp. 161-170.
- Frei, (H.) *La Grammaire des fautes*, Slatkine Reprints, 1982, réimprimé de l'édition de Paris-Genève, 1929.
- Grevisse, (M.) *Le Bon Usage*, dixième édition, Duculot, 1975.
- Moignet, (G.) *Le Pronom personnel français, essai de psycho-systématique historique*, Klincksieck, 1965.
- Moignet, (G.) "Sur le système de la personne en français", in *Travaux de linguistique et de littérature*,

- XI, 1972, pp. 71-81.
- Muller. (C.) “Sur les emplois personnels de l’indéfini on” in *Langue française et linguistique quantitative*, Slatkine, 1979, Genève, pp. 65-72.
- Spitzer, (L.) “Vous et nous régimes atones de on”, in *Français Moderne*, n° 8, 1941, pp. 323-343.
- Tamba-Mecz, (I.) “De la double énigme de ‘on’ aux concepts de pronom et de personne linguistique en français et en japonais” (manuscrit) 1990.
- Violet, (C.) “Mais qui est on?” in *Linx*, n° 18, 1988, Nanterre, pp. 67-75.
- 青木三郎 「人称に関する日・仏対照言語学的研究」『文芸言語研究・言語編』 n° 16, 筑波大学, 1989, pp. 1-44.
- 田口紀子 「不定名詞 “on” の汎人称性について」『仏文研究』n° 21, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 1990, pp. 21-34.

Larousse *Grand Larousse de la Langue Française*
Robert *Dictionnaire alphabétique et analogique de la Langue Française*
Trésor *Trésor de la Langue Française*